

相変わらず、カレはほうきで道路を掃いていた。僕は『お早うございます』の挨拶も言わずにカレの前を自転車で通り過ぎる。

いつも通りカレは、僕を哀れむような目つきで会社へ送り出してくれる。

今日は、少し遅く家を出た。何故なら彼女より後に電車へ乗り込みたかったからだ。

いつもなら僕の方が先にシートに座っているが、今日はそれでは駄目なのだ。

駐輪場に自転車を止め、駅の階段を下る。地下一階に改札があり、ホームは地下二階となる。天井を支える緑色の柱をよけながらいつもの電車へ乗り込んだ。乗客は僕と先にシートに座る彼女だけだ。

ここで、いつもなら僕の指定席へ向かうのだが今朝は違う。そう、僕の方から仕掛けてみるのだ。

僕はゆつくりと歩き、彼女の横に静かに座った。

「おはようございます」

一言だけ言ってみた。

たまらなく良い匂いのする彼女を間近で見てみた。思ったより肉付きがよい。首は細く身長

も高いので華奢に見えるが、鎖骨から胸にかけてのシルエットが案外ふくよかだった。

彼女は一瞬呆気にとられた表情を見せたが、次の瞬間には笑顔に変わっていた。

「おはようございます」

彼女は僕の眼をまっすぐ見ながら言った。

「未下香子さんですね。お手紙拝見しました。僕にお話があるとのことですが、どういったご用件ですか・・・」

まだ僕の眼を見ている。

「僕は男女に友情はあり得ないと確信している人間です。それにお察しの通り僕は結婚もしていないのです」

冷静な口調を守りながら続けた。

「貴女の目的を教えてくださいませんか」

依然として、僕の眼を見ている。下から覗き込むような眼差しに不覚にも愛おしきと不思議な懐かしさを感じてしまった。

彼女は僕の方へ膝を向け座り直した。そして言った。

「何も言わずに二日間だけ私のためだけに時間をいただけませんか。メールマガジンの一件も含めて、全てをそのときにお話ししようと思います」

精一杯の笑顔をつくっているのだが、僕に何かを必死に伝えたいがために頬が少し引きつ

ているように見えたが、美人のそれはかえって男の胸の中をくすぐるのであった。

僕も動揺していたが負けるわけにはいけないので、あくまでも冷静さを全面に打ち出していた。

「その二日間というのは具体的にどういうことを意味するのでしょうか」

僕は抽象的な質問でかえした。

「・・・二日間、私と一緒に何処かのリゾートホテルなどで過ごしていただければと思っております。たくさんお話しなければいけないことがあるのです」

さらに僕を動揺させる。しかし彼女の訴えが必死であることがその表情からにじみ出ているので、なんとか意向に沿うような形にしてあげたいと思った。

それに、何だか彼女に対して親しみを感じている僕がいる。

「わかりました。何とか都合をつけます。ただし条件があります。最終的には全てを僕に話してくださいね」

僕はなんとか笑顔を作って言った。しかし内心、罨にはめられているのではないかという疑いから少なからずとも恐怖がこみ上げてくる。彼女のバックから暴力団関係の男が出てきて、大金を強請り取られるイメージがびつたりだ。

電車の扉が閉まりゆつくりと発車しだした。加速の途中、電車が少しだけ揺れる。その時、彼女の肩と僕の方へ向けられていた膝が僕の体に接触し、不覚にもドキツとしてしまった。

「私は秘密を必ず守ります。だから余計な心配はしないでくださいね」
彼女は僕が結婚していることに気を使ったのか、このように言った。

でも僕としてはサヤカを裏切ることにはできないし、したいとも思わない。でも、未下香子に感じる異様な親近感と懐かしさのような切ない感覚の理由を確かめたくて、二日間を彼女に委ねてみることに決めた。

・・・『タントウ、ミシタ・キョウコ』か。一体彼女は何者なんだ。

続く